

聖書 エゼキエル書2章1節〜3章4節、マタイ福音書4章18〜25節、

主イエスは紀元後28年の夏あたりに洗礼者ヨハネから洗礼を受けたと考えられています。そして、主イエスはヨハネによつて洗礼を受けた直後から公の活動を始められたようです。さらに、ヨハネが殺害されると、「私は多くの苦しみの中の、時の宗教指導者らによつて殺される」と言う、いわゆる受難告知を繰り返し語るようになります。このように見てくると、主イエスは洗礼者ヨハネの活動に何らかの形でかかわっていたことが想定されるのです。わかりやすく言えば、ヨハネから洗礼を受けたことで、ヨハネの弟子のような立場に一時期なつていたと考えられているのです。ですから、福音書は洗礼者ヨハネから洗礼を受けたという歴史的事実を隠すことなく伝えているのです。

このように、主イエスはヨハネから洗礼を受けて、弟子としての活動を経て、現実世界が人間の眼で見えるならば、神の御旨から程遠いように思えるけれども、実は神による支配(神の国)を受けていることに人々は気づいていない。だから「神の国(支配)は近づいた。悔い改めて福音を信じなさい」という宣教活動を始めたのです。つまり、イエス自身がヨハネから洗礼を受けて弟子のような立場にあつたので、イエス自身が神の国運動を展開していくときに、最初に弟子を召命していくことになるのです。弟子として召されることによつて、実は神の御旨が初めて、召された弟子自身に自覚的な形で示されることになるのです。主イエスの弟子の召命の記事を読むと、イエスがガリラヤ湖のほとりを歩いていた時に、ほんの思い付きで目に着いた漁師たちに「わたしについて来なさい。人間をとる漁師にしよう」と声掛けをして弟子にしたように見えます。第一、弟子として相応しい教養があるかどうかを事前に確かめてもいないわけです。まるで、湖のほとりで網の手入れをしている漁師の姿が目飛び込んできたので、弟子にならないかと声掛けを試みたら、彼らがイエスについてきたかのような描かれ方をしているのです。このことは、イエスの弟子としての資格・要件が何もないことを表しているのです。そして、イエスの召しに対して、応答していく過程で、弟子としての自覚が次第に培われていくことを示しているのです。最初から、イエスの弟子にふさわしい自分がいるわけではないのです。

1

昨日は、川島温美先生の納骨が行われました。昨年は川島貞雄先生、川島温美先生を天に送り、昨日の納骨式を終えてみて、私が強烈に思わしめられたのは、私が主イエスの弟子としての学びを導いてくれた先生がたが皆天に行ってしまったんだなという思いです。今橋朗先生、関田寛雄先生、西村俊昭先生らが天に帰還してしまい、主イエスの弟子としての学びを導いてくださった方々がもうこの世に誰もいないというさみしい気持ちになりました。言い方はおかしいのですが、主イエスが十字架にかかつて死んでしまった後に、弟子たちはきつと心の支えを失ったかのようなさみしくて、心もとない気持ちに襲われたのだろうかということが、私にもわかったような気持ちになりました。

さて、昨日の納骨式では、川島温美先生が祈る際に、しばしば言及していたマタイによる福音書5章45節後半の『父は悪人にも善人にも太陽を昇らせ、正しい者にも正しくない者にも雨を降らせてくださる』という聖句の意味について考えてみました。温美先生は「神は悪人にも善人にも太陽を昇らせ、正しい者にも正しくない者にも雨を降らせてくださる」という言葉をよく祈りの中に入れておられました。この45節の聖句は、その前の44節の『敵を愛し、自分を迫害する者のために祈りなさい』という有名な言葉に続いて主イエスがおっしゃった言葉です。

「汝の敵を愛せよ！」という言葉はキリスト教に関心がなくても、誰もが一度は聞いたことのある言葉です。自分の敵を愛するという非常に難しいことが、人間の業として行うことができることなのだろうか、という懐疑的な思いで聞いた記憶が多くの方にあると思います。かつての私もその中の一人でした。ご存じの通り、公民権運動のキング牧師が唱えたのが、「汝の敵を愛せよ」というスローガンでした。黒人差別を撤廃させるために、その黒人差別をしても平気で、疑問にも思わない白人たちは現実には当面の敵であることは間違いないわけです。そういう現実が確かにある。けれども、そういう現実を打ち破るにはどうしたらいいのか。当面の敵である白人という存在と、その差別意識を制度的に補強する行政当局は、確かに敵と思えるような相手である。けれども、その敵を愛することから始めてみようと、例えば座り込みを暴力的に排除することに対しても無抵抗で対抗していったのです。この時代、明らか

にキリスト教は白人の宗教でした。けれども、マタイ福音書にある、この汝の敵を愛し、自分を迫害する者のために祈りなさい、という主イエスの教えをそのまま実践することで、白人社会を支えてきたキリスト教にイエスの言葉で風穴を開けることになったのです。

残念ながら、私は温美先生に、この45節の聖句を何故お祈りの中に入れるようになったのですかと聞くことがないままであったことを今さらながら悔やんでいます。ひとつ思い当たることは、1977年に青山学院大学で神学科が廃科になったことです。私は当時、日大の法学部の新聞学科の4年生で、キリスト教とは無縁の学生生活を送っていました。このことはよく覚えています。と言うよりは、その廃科の前に、青山学院大学当局が文鮮明の統一協会が学生組織を用いて神学科を廃止に追い込んだというニュースを聞いて知っていました。いわゆる原理研究会という学生組織を各大学に誕生させて、反共産主義運動を学生に誘発させるということをしていたのですが、その計略に当時の大木金次郎理事長がのつかつて私的に神学科廃科に利用したのです。神学科の教員が既に下火になっていた学生運動の学生たちの意見を聞く姿勢に腹を立てたというのが動機です。自分の思い通りにならないならば、毒をも飲むような行為です。のちに大木理事長が亡くなって、深町理事長の時代になって青山学院大学の民主化が進んだのです。

この出来事はキリスト教界に強い衝撃を与えました。すでに川島貞雄は日本聖書神学校の教授になられていましたが、その後もいろいろな大学で発生した事件を受けて、理事会や評議員会の法改正がなされて、現在は理事長の独善的な施策はチェックされるようになりましたが、当時は、そういうことが起こっていたのです。当時、大学の事務局に勤めていた教員の方が当時のことを振り返って、神学科の教員であった関田寛雄先生が夜間部に移されて、そして、助教教授であったのですが、その関田先生を教授に昇格させる教授会での議決が、理事会で大木理事長の鶴の一声で握りつぶされていたことを苦々しく話していたのを思い出します。他の大学に移った神学科の教員も大変でしたが、大学に踏みとどまった教員も忍耐し続けていたのです。当時は、それがキリスト者が直面した現実でした。

2

このような現実に対して、主イエスは汝の敵を愛せよ！と告げたのです。青山学院大学の神学科の廃科の事件は50年以上も前の話で、改めて話題にあがることも少ない状況にあります。青山学院大学と言えば、近年は箱根駅伝の優勝校というイメージしかありませんが、温美先生の納骨に当たり、温美先生が当時直面していた現実を振りかえってみました。青山学院大学の神学科の廃科と、温美先生のお祈りの言葉に関連性があるかどうかは、温美先生に聞かなければ真偽はわかりません。けれども、誰もが時代の子として生きているわけで、その時代の現実の影響を受けているわけです。大木理事長時代を経て、青山学院大学が民主化されていく経過も見ておられた温美先生は、『敵を愛し、自分を迫害する者のために祈りなさい』という主イエスの御言葉の前に幾度か佇んだと思います。温美先生ばかりでなく、私たちの誰もが例外なく、本当に主イエスの言われるように、敵を愛し、自分を迫害する者のために祈ることができるような弟子になることができるのか、その問いの前に立たされていることを覚えるものです。

確かに、現実の世界では、私たちは人を嫌い憎み、他人との間に垣根を設けてしまっていますが、そうした人間の現実を十分に主イエスは承知していながら、汝の敵を愛せよ、自分を迫害する者のために祈りなさい、と勧めているのです。この言葉は理想論で終わるものではないと思います。現実には、敵をなかなか愛することができないし、ましてや自分を迫害する者のために祈ることはできません。けれども、そのようにできない自らの「弱さ」を自覚したとき、その現実を打ち破る力が自分の中に呼び覚まされることが起こるのです。現実の壁は自分の力ではとても打ち破ることができそうもない、そういう自分の「弱さ」を自覚したうえで『父(神)は悪人にも善人にも太陽を昇らせ、正しい者にも正しくない者にも雨を降らせてくださる』という言葉を聞くと、神はすべての人をすべからず導いてくださっていることに気づかされます。人間にとつて現実の世界は弱肉強食の世界に映っています。そういう世界では、弱者を助けることは不利益になると考えられがちです。けれども、そういう現実の中にあつても、弱者と共にあろうとするとき、自分の中に現実を打ち破ろうとする神の力が湧いてくるのです。